

# 鬼を打ち、心を打つ

岩首祭り『鬼太鼓が結んだ絆』

鼓童の前身「佐渡の國鬼太鼓座」時代から習わせていただいている岩首の鬼太鼓。今では、皆さんは毎年新しい研修生を迎え、巣立ちを見送る家族のような存在です。

祭りに加えていただいて15年、今年の岩首祭りは、格別の想いとともにありました。

文●千田倫子

九月十八日の岩首の祭り、今年も集落の方々に温かく受け入れられた研修生は、年に一度のハレの日の喜びを身体いっぱい体験した。

本番前の十三晩の稽古。神社の石畳の上では、地元の若者が当日のヒーローである青鬼・赤鬼に選ばれるために懸命に稽古を重ね、師匠連にアピールをする。石畳をはずれた広い場所を占拠するのは研修生。毎年一年生が、一から鬼打ち（鬼を踊ること）を教わる。佐渡の集落の祭りで、毎年初心者が十人も入ってくることはまず無い。

大変なのは、教える側である。いつしか「研修生係」という

役職が定着し、今年は今本秀樹さんと佐藤保男さんが二班に分かれて研修生を一手に引き受けてくださった。係ゆえ、師匠連は稽古を休めない。\*ナンバの動きもギクシャクするような初心者以前を相手に、十三日間で二通りの踊りを覚えさせねばならない。覚えないと、祭りで踊れないからだ。賑やかな口上に続いての、あの太鼓の音と笛の旋律、そして皆のかけ声と笑顔に包まれての、身体の底から突き上げてくるような喜びは、踊らないと味わえないのだ。

祭りに初めて参加させていただいた一九九五年当初、研修生が鬼打ちを学びたいならば、と

その大変な役に最初に手を上げて下さったのが、\*中村数哉さんと大石明秀さんである。各家から上がる御花（御祝儀）は、もちろん岩首の地元の鬼達に向けたもので、他所者の研修生達が踊る機会は無く、機会が得られるとも思っていないかった。しかし、せっかく十三日稽古したのだから、と中村さんと大石さんは自分の御宅で彼らが全員踊れる額の御花を鬼太鼓連中に渡し、研修生に祭りの喜びを与えてくださった。この始まりから年月を経て今、集落の皆さんに毎年当たり前のよう温かく受け入れられ、祭りに参加することができている。

今年の祭り、中村さんの御宅の門付けはいつもと少し違っていた。「中村班の研修生、出て来い」と口々に名前を呼ばれ、いくつもいくつも鬼を打った。鼓童に残った者もいれば、この祭りに里帰りの、今は地元で活躍している修了生もいたが、ここに師匠の姿は無い。昨年の九月の祭りでは元氣に見えた中村さんは、そこから体調を崩され今年一月、末期のガンで亡くなった。岩首の若衆も、鼓童の私達も、この鬼打ちをもって天国の中村さんに呼びかけたかったのだ。

副部长という役職が予定されていた中村さんに代わり、大石さんがその役をかって出たと聞いた。祭り当日、大石副部长がしていたネクタイが亡き中村さんのものだったと知ってみんな泣いた。

集落の祭りひとつ、そこで研修生が身をもって体験するもの大きさは計り知れない。岩首の皆さんは、その鬼打ちのように激しく、全身全霊で研修生の心を打ち続けてくれている。

\*ナンバ：右手右足のように同側を使う、昔の日本人の身体使いで、日本の芸能や武道の基本的動き

\*中村数哉さん：中村さんのお祖父様は、鼓童の前身である鬼太鼓座が初期に教えを請うた鬼太鼓の師匠でもあった



右：一九九五年の祭り。教え子を応援する中村さん。  
（写真：吉田勲）  
上：今年の祭り。師匠に見守られ、ハレの鬼を打つ。